

はじめに

津田左右吉は、今から五十年前の一九六一年（昭和三十六）十二月四日（月）午前四時、東京都武蔵野市境の自宅で亡くなった。時に満八十八歳である。さかのぼって、その誕生は一八七三年（明治六）十月三日であるが、なぜか戸籍上では、十二月四日の生まれとされていた。奇しくも、同じ月日に亡くなったことになる。出身地は、岐阜県加茂郡栃井村（現美濃加茂市下米田町東栃井）であり、父は尾張藩の士族であった。

本論文集は、この津田左右吉没後五十年を記念して出版される。その経緯については、早川万年氏の「あとがき」に詳しい。

現在、津田については、第一次『津田左右吉全集』全三十三卷（一九六三〜六六年）と、第二次全集全三十五卷（一九八六〜八九年、ともに岩波書店）が存在し、質量ともに群を抜く全集となっている。しかし、この質量を読みこなすことは容易でない。研究分野も、記紀批判の研究、日本の「国民思想」研究、中国思想の研究、「満鮮」地理歴史研究、そして歴史教育その他の発言などと多岐にわたる。なかなか個人で太刀打ちできるものではない。

また、全集とは別に、死後、新書・文庫版も刊行された。たとえば、岩波文庫として『文学に現は

れたる我が国民思想の研究』全八冊（一九七七、七八年）、岩波新書として『シナ思想と日本』（一九八四年。一九三八年版の新装復刊）がある。さらに近年では、岩波文庫に今井修編『津田左右吉歴史論集』（二〇〇六年）が加えられた。しかし、このうち前二著は、今日絶版となっている。

この間、津田に関する論述も出た。死後ほとんどなくの追悼論評、全集の月報、論集や雑誌に載せられた単独の論説、早稲田大学の出版物などがそれである。まとまった論著・論集としては、家永三郎『津田左右吉の思想史的研究』（岩波書店、一九七二年）、上田正昭編『人と思想 津田左右吉』（三一書房、一九七四年）、大室幹雄『アジアンタム頌 津田左右吉の生と情調』（新曜社、一九八三年）、鈴木瑞枝『黄昏の人 津田左右吉』（八雲書房、一九九四年）などがあり、展示図録としては、美濃加茂市民ミュージアム編『津田左右吉——その人と時代——』（同ミュージアム、二〇〇四年）を上げておきたい。さらに、津田と内藤湖南を取り上げた増淵龍夫『歴史家の同時代史的考察について』（岩波書店、一九八三年）、また、津田と三宅米吉・森鷗外をとり上げた雑誌特集「日本古代史の研究と学問の自由」（『歴史評論』三六三、一九八〇年）、津田と村岡典嗣・和辻哲郎をとり上げた雑誌特集「日本思想史学の誕生」（『季刊日本思想史』六三、二〇〇三年。関連雑誌として『日本思想史学』三五もある）なども刊行された。

これら津田に関する論述の発表は、両全集刊行後に、それぞれ集中する傾向がある。やはり、全集が読まれた結果であろう。また、津田の研究分野の広さや、津田が提起した諸課題の重要性、そしてその資料の多さに呼応して、それぞれの論述も同様ではない。とくに、第二次全集後である一九九〇年代以降は、時代とそのメディア環境の変化によるのであろうか、さまざまな観点からの津田論が出

るようになった。毎年、どこかで津田は論じられてきたのである。

思えば、これは不思議な現象である。なぜなら、重厚長大とも言える津田の全集を読みこなすのは、容易なことではない。また、手に取り易いはずの文庫・新書本も絶版が多く、広く読まれている環境にはないからである。にもかかわらず、間断なく津田論が現れるのは、限られた人たちの範囲内であるとの見方もあり得ようが、だからと言って、その人たちが、とくに津田論を専門としているわけではない。やはり、避けて通れない津田、どこかで突き当たる津田の存在がなせるところであろう。そして、その津田論は、津田への「読み違い」が幾重にもながく続いたことへの挑戦となつて、さらに津田の存在と魅力を増幅させてきたとも言える。

しかし、この場合の「読み違い」とは、正否の二元論で割り切れる「誤読」とは異なり、「読みのズレ」「読みのネジレ」「読みの組み換え」というような意味である。

たとえば、現行の教科書記述によると、津田の研究は大正時代の自由主義的な実証研究の一環であつたとされる。しかし、ここに「読み違い」はないか。たしかに、津田の最初の大著『神代史の新しい研究』は一九一三年（大正二）に、ついで『文学に現はれたる我が国民思想の研究 貴族文学の時代』は一九一六年（大正五）に刊行された。この間、「満鮮」地理歴史研究も報告されている。したがつて、大正時代に入つて津田の研究はまとめられていくのであるが、大正時代が津田の研究を突然生み出したはずはない。

少なくとも津田は、田口卯吉の企画編集になる『国史大系』を予約購読しはじめた一八九七年（明

治三十)三月から、本格的な記紀の批判的研究にとりかかった。時に満二十四歳である。この『国史大系』の第一冊目は『日本書紀』であり、第七冊目が『古事記』であった(二八九八年刊)。そこには、膨大な書き込みがある。津田が日記に「歴史は本職」と書き、「上代紀年」論に多大な関心を寄せたのも、この頃であった。そして、この研究は、およそ十五年後から結実していくのである。さらに遡れば、帰農士族の子として、明治憲法制定以前に生まれ育った津田の自由と孤独、そして反骨の精神環境へと、その淵源は辿れそうである。

また、津田の起訴事件についても「読み違い」はないか。これについては、学問の自由に対する国家「弾圧」事件として知られている。たしかに、その局面を否定することはできない。ところが、津田自身、この裁判が「弾圧」ではないと、度々、述懐しているのである。今、ここで、その津田の理由を反復することはしないが、この津田発言に困惑した人は多い。これも「読み違い」というべきであらう。

これに関連して、記紀批判研究への「読み違い」もある。たとえば、津田の訃報に依って読売新聞に追悼文を寄せた和歌森太郎は、いわゆる戦後の津田を回顧して、「先生のことだから天皇制否定だろうなどと思った人が少なくなかったが、思えばそそっかしい話だった」と述べている。つまり、多くの人が、津田の記紀批判研究を「読み違い」していたことになる。この点は、晩年の津田自身も触れており、自分の著作が「誤解」され続けてきたというのである。つまり、記紀の記載の「歴史性事実性を否定する」方面のみが取り上げられているが、それは「主要目的」を達するための「二方法」

「準備作業」に過ぎない。また、「否定」ということだけであれば、これまでの諸学者も試みたではないか、と。本当の目的は、いかにそれが「歴史的事実」ではない「物語」であったにせよ、なぜ、そのような「物語」が出来たのかという「思想と心情」を説明することにあるという。そして、その「思想と心情」が記紀記載に写し出されているとすれば、それは「事実」というよりも「真実」に近いというわけである。

ここで津田は、「事実」と「真実」とを巧みに区別していた。「事実」の否定は「真実」の否定にはならない。あるいは、「事実」の否定作業を積み重ねることによって、かえって「真実」が現れてくるといっているのである。この逆説と転回は、「事実史」追求と「思想史」（思想上の事実史）構築との関係としてもとらえることができる。また、「史料」がそのまま「歴史」ではないという関係にも及ぶことになる。津田の天皇制理解にしても、記紀記載の「事実」批判作業を通じて得られたものであり、日本は天皇による征服国家でもなければ、民衆を直接支配し、民衆からの抵抗をうける天皇でもないところに、天皇制の素形があるとの「真実」を肯定したのである。そして、明治憲法下で推し進められた新天皇制に大いなる違和感を抱き続け、早くから津田自身が言う象徴天皇制の回復を望んだものともみられる。

津田の記紀批判の過程で、「帝紀」「旧辞」そして「神代」記述の成立期が問われたことは確かである。また、津田の死後、これに対する反論も出ている。その反論には首肯できるところも多い。しかし、これをもって、津田の「読み」が終わったわけではない。歴史における「事実」と「真実」、「事

実史」と「思想史」、「史料」と「歴史」の関係、あるいは、その逆説と転回の論理、そして、歴史を「読む」ことの方法はどうあるべきかが、日本では、津田によってはじめて具体的に、かつ精緻に、そして自前で例示されたのである。それはまた、「史料」と「歴史」との間にある深い溝を想起させ、「史料」から「歴史」にたどり着くことの危うさ、怖さも思い知らされたことになる。私たちは、このことをどれほど「読んだ」と断言できるのだろうか。

津田への「読み違い」は、やはり続いているように思われる。和歌森の言う「そそっかしい」私たちなのである。しかし、あえて弁明すれば、津田の「一方法」と「主要目的」との逆説的な関係は難題中の難題であり、そこに津田自身の飛躍と「読み違い」がなかったとは言いつれない。そのためか、津田自身の行論も、実に分かりにくい。津田への「読み違い」は、津田の側からも準備されているのである。

本論文集は、その意味において未解決の津田を、または、未解決の私たちを問いかけることになる。主題である「史料としての『日本書紀』」、副題である「津田左右吉を読みなおす」とは、このような視座のもとで導き出された。

『日本書紀』は、津田が『国史大系』の初回配本として「読み込んだ」記念すべき「擬似歴史」書である。つまり、「歴史」に「擬似」させて説明した古典である。津田は、これを「史料」として「読んだ」のであり、「歴史的事実」として「読んだ」のではない。しかし、その否定作業を通じて「歴史」を、あるいは「真実」を、つまり「思想上の事実」を呼びだし、「史料」とは異なる世界な

いし次元において肯定しようとしたのである。それは、ひとつの壮大な「歴史」の理論であり方法であった。

その「歴史」とは、「事実史」ではなく「思想史」であると言い換えるべきかもしれない。やはり、「文学に現はれたる（我が）国民思想の研究」者なのである。しかし、この問題の深奥には、「事実史」への信奉を安易に信頼しない津田がいたように思えてならない。言い換えれば、意味としての「歴史」を構想していたのであって、「事実史」の不可能性もしくは「事実史」信奉の欺瞞性を見抜いていたふしがある。

この営みは、「史料としての『日本書紀』」をいかに受け取り、そこから何を適切に創り出すかというところに等しい。ところが、その営みは、実は『日本書紀』の撰上とともに始まっており、それは、『日本書紀』のながい受容史であったとも言える。その果てに、津田の否定的な「読み」と肯定的な「読み」との逆説的な、体系的な転回論理が登場した。そのあとに、私たちがいるのである。本論文集は、そのながい『日本書紀』「読み」の道程を、そして、『日本書紀』を典型とする「史料」「読み」の道程をたどることになった。

しかし、今の私たちが「史料としての『日本書紀』」をいかに受容するかということは、津田左右吉をいかに受容するかということでもある。その時、津田への幾重にも交わる「読み違い」を解きほぐしていく過程が、有効にはたらくであろう。それは、あたかも、津田が記紀を批判していく過程で、肯定すべきものを探り当てようとした手法に近い。その意味では、津田自身がむしる記紀のよう

な「史料」となるのであり、記紀と同じように、あるいはそれ以上に多面的な素材から成り立つ「史料」なのである。したがって、本論文集の半面は、やはり「津田左右吉を読みなおす」となるろう。

このような趣旨のもとで、本論文集を贈り出したい。貴重な論考を数多くお寄せいただいた執筆者のみなさんには、この間、「史料としての『日本書紀』」を、または「史料としての『日本書紀』」の受容史を、そして津田ワールドを「読み直なおす」ことに取り組んでいただいた。ここに、あつくお礼申し上げるとともに、執筆者各位の「読みなおし」が、これからながく、広く、そして深く受け止められていくことを念じて止まない。

二〇一一年九月

新川登亀男

あとがき

本書の主旨は、冒頭の新川登亀男氏の「はじめに」に述べられているとおりであるが、刊行にいたる経緯をここに少し補足しておきたい。

二〇〇九年二月、岐阜県美濃加茂市文化の森市民ミュージアムの可児光生氏が岐阜大学のわたくしのところに來られた。その際の話は憶えていないので、それほど大きな用件ではなかったであろう。ただ、帰りがけに、可児さんは、再来年、津田左右吉没後五十周年を迎えるとのことを告げられた。わたくしは、津田没後五十年が目前に迫っていることにまったく気づいていなかったが、その時は、お互い、何か企画を検討することになるかもしれないね、という程度の認識であったと思う。

津田は、現在の美濃加茂市下米田の出身で、美濃加茂市文化の森市民ミュージアムには、津田のコーナーもあり、二〇〇四年の二月には、「津田左右吉——その人と時代——」と題する企画展を開いたこともあった。地元の下米田小学校には、津田が生前に寄付した書籍が残されており、津田左右吉顕彰会の事業も、地元への熱意のもとに、ながく続けられている。

さて、それではどのような企画を考えればよいのか、そもそも、記念事業が可能であるのか、まずは、津田がなごらく教鞭をとった早稲田大学の教授であり、二〇〇四年の企画展の際も、シンポジウム開催をはじめ、万般をリードしてくださった新川登亀男氏に相談した。何度か話を重ねながら、共有した問題の第一は、今の学問状

況と津田左右吉の存在を本当に結びつけられるのか、ということであった。

当初からわれわれには、たとえ、津田左右吉を回顧する展示が開催されたとしても、現在（欲を言えば将来にわたって）の学界に有意義な発信がともなわなければ、企画として、津田没後五十年に値しないという気持ちがあった。一方で、津田の業績はまことに多岐にわたり、その現代的な意義を全面的に問ひ直すのは、きわめて困難である。学術的な論集を実現するにも、諸般の事情を考慮すれば、やはりテーマを限定せざるを得ない。慎重な検討の上、新川氏が提示されたのは、『日本書紀』を主なターゲットにするということと、古代史学を軸としながらも、関連分野の研究者幾人かにも、論文執筆の呼びかけを行うという方向性であった。

その後、勉強出版のご理解を得て、二〇一〇年の四月に、津田左右吉没後五十年を念頭に置き、『日本書紀』をめぐる諸問題、津田の学問等について、論文執筆を呼びかけることになった。一年余を経て、ご覧のとおり力作が寄せられ、ここに刊行のはこびとなった。

本書刊行と時を同じくして、早稲田大学・美濃加茂市民ミュージアムの共同で、津田展が開催されることになっていく。没後五十年という節目の年に、大学と自治体が連携して有意義な記念展示が実現できたのは、双方の関係者の尽力によるものであり、本論集の計画も、そのような取り組みと連動して進められたのである。

『日本書紀』を論じる際に、津田の研究を避けては通れない。また、津田の長い学問人生において、『古事記』『日本書紀』はつねに厳しい考察の対象であり続けた。したがって、津田の学問の意義を問う際に、『日本書紀』を一つの軸とすることは有効であろう。ただ、それ以上に、今のわれわれに求められていることは、あらためて広い視野から、史料としての『日本書紀』の性格を考えてみることに、そして『日本書紀』が歴史的にいかなる「役割」を果たしてきたのかを検証し、そのうえで、自らの問題意識を深め、方法論を追求していくことであ

ろう。津田の業績が没後五十年を経ても読み継がれるのは、まさに自らの生を賭して、さまざまな問題に立ち向かったからである。「批判」を学問として成立させるにあたって、津田はそのような生真面目さを貫いたと言えよう。今あらためて、津田の視点と論説は、多方面から問い直され、読み直されてよいのではないか。

本書の論説は、このたびの企画を前提とした研究会の開催や、執筆者全員による意見交流のうえに成り立ったものではない。原稿の締め切りが近づく頃に、一度、声をかけて意見交換の場を設けることも考えたが、新川氏と日程の相談を始めた矢先に、あの震災の日を迎えた。そのため、論文間には、同じ事柄について見解を異にする局面、よく似た論点が提示されている箇所も見受けられる。ただ、それらは、執筆者各位の真摯な取り組みの上に述べられた見解であり、そのいずれもが研究の最前線を示していることは、本書の読者もよくご理解くださることと思う。

津田没後五十年を記念しての論集が、ここにこのような内容をもって結実したことは大きなよろこびである。日頃、研究上の交流が乏しいにもかかわらず、本企画に賛同してくださった方々、そして、充実したご論考をお寄せくださった執筆者の各位に、深くお礼申し上げます。

なお、勉強出版の池嶋洋次社長、編集部の方、吉田祐輔氏には、終始、行き届いたご配慮をいただいた。感謝申し上げます。次第である。

二〇一一年九月

早川 万年